九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[16]文學研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2557041

出版情報：文學研究. 16, 1936-07-28. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

文學研究　第十六輯　（昭和十一年七月發行）

故成瀨正一教授追悼號

弔辭

故成瀨正一君ノ靈ニ白ス君ハ我ガ九州文學會ノ委員トシテ長ク力ヲ會ノ發展ニ致シ君ノ論文亦常ニ文學研究ノ誌上ヲ莊レリ惟フニ會ノ今日アル君ニ負フ所ノモノ多シ然ルニ今卒カニ君ガ長逝ニ遇フ痛惜曷ゾ禁ヘム玆ニ會同人ニ代リ敬ミテ哀弔ノ意ヲ表ス冀ハクハ來リ鑒ミヨ

昭和十一年四月十六日

九州帝國大學法文學部九州文學會總代　春日政治

弔辭

維時ノ昭和十一年四月十三日九州帝國大學教授正五位成瀨正一君溘然トシテ逝ク嗚呼哀哉本日君ノ葬送ノ儀ニ方リ小職ハ我ガ九州帝國大學法文學部ヲ代表シテ謹ンデ君ノ靈ニ告グ

顧フニ去ル二月我等ハ既ニ我ガ大森教授及ビ上原助教授ヲ哭シテソノ涙痕未ダ乾カザルニ何ゾ圖ランマタ我ガ成瀨教授ヲ哭スルノ日アラントハ實ニ我ガ法文學部ノ不幸是ヨリ大ナルハナシ君ヤ生平壯强近比益々頑健ナルヲ信ジ居タリ而モ今ヤ起タズ幽明境ヲ異ニス嗚呼哀哉

君ハ香川縣ノ人明治二十五年四月二十六日ヲ以テ生ル第一高等學校ヲ經テ東京帝國大學文科大學文學科ニ學ビ大正五年七月ソノ業ヲ卒ヘソノ年八月更ニ歐米ニ遊ビ八年二月歸朝セリ君內地ニ留マルコト僅ニ二年更ニマタ佛蘭西文學研究ノ爲ニ佛國ニ赴キ十四年二月歸朝ソノ年十月聘セラレテ我ガ九州帝國大學講師ト爲リ嗣デ翌十五年五月本學教授ニ任ゼラレ法文學部勤務ヲ命ゼラレタリ而シテ昭和十年一月現職ヲ以テ歐洲各國ニ出張ヲ命ゼラルルト共ニカアン海外旅行財團ヨリ佛國ニ派遣セラレ特ニ本學部ヨリ佛國ニ於ケル日本文化ノ紹介實

情調査ノ囑託ヲ受ケ同年十一月歸任以テ今日ニ及ベリ聞ク君ノコノ行、調査研究ノ餘暇躬ラソルボンヌ大學ノ講壇ニ立チ佛蘭西語ヲ操リ東洋文化ニ就テ縱譚横說スル所アリ君ノ名聲彼地ニ籍甚タリトマタ我國學界ノ盛事ト謂ツベシ

抑々君ハ天稟ノ文才ト詩人的情熱トヲ以テ惠マルル所ナルノミナラズ內ニ深遠ナル世界觀ヲ藏シ其ノ詩人的文才ト文學的見識トハ夙ニ大學在學中ノ小說又ハ戲曲ノ創作並ニ文藝的飜譯ニ於テ之ヲ發揮シタル所ニシテ君ハ當時既ニ文藝界ニ於ケル輝ケル一存在タリシナリサレバ漱石夏目先生モ君ノ非凡ノ材ヲ認メ其ノ師弟ノ交ヤ甚ダ濃カナルモノアリシガ如シ而シテ文學者トシテノ君ノ學殖高風ニ至リテハ世人ノ齊シク推稱欽慕シタル所ナリ君ハ東京帝國大學ニ於テ英文學ヲ專攻シ而シテ卒業後前後三回八閱年ノ久シキニ亘リ歐米各國ニ遊學シ其ノ主タル研究ハ佛蘭西文學ナリシト雖モ更ニ英獨文學ヲ修メ以テ佛蘭西文學ノ理解ヲ深クスルニ力メタリ君ハカカル遠大ナル規模ト豐富ナル資料トヲ以テ君獨特ノ佛蘭西文學史ノ研究ノ完成ニ精進シタル所ナリ君ガ遺シタル數篇ノ佛蘭西文學史ニ關スル研究ハ何レモ實ニ卓越シタル名篇ナリト雖モ未ダ以テ君ノ造詣ト蘊蓄トノ如何ヲ計ルベキモノニ非ズ而シテ又君ガ漁釣ニ尋常ナラザル趣味ヲ有シタルコトハ世人周知ノコトニ屬ストコロ漁釣ガ君ノ單ナル趣味ナリト解スルモノアラバソハ抑々君ヲ解スルノ甚ダ低ク君ヲ知ルノ極メテ淺キニ因ルニ外ナ

ラザルトコロナリ思フニ君ノ漁釣ニ對スル態度タルヤ常人ノ夫レト甚ダ趣ヲ異ニスルヲ見ル即チ君ニ在リテハ漁釣ハ斷ジテ單ナル一時的俗人的享樂ノ趣味ニハ非ズ君ノ心身ヲ慰ムル樂園タルト共ニ實ニ禪佛敎ニ於ケル修禪ノ一道場ニシテ君ノ釣ヲ垂レタル境地ハ座禪三昧ノ境地、解脫ノ境地、一竿ノ釣竿卽チ無我ノ境地タリ卽心是佛ノ宗敎的境地タルナリ眞善美合一ノ境地ニ外ナラザルナリ君ノ文學理論ハ實ニ此ノ境地ニ體得シタル崇高ナル觀念ニ其ノ基礎ヲオク所ナルヲ信ズ卽チ君ハ斯クノ如キ非凡ノ詩人的宗敎的文學者タルナリサレバ君ノ九州帝國大學法文學部ニ於ケル佛蘭西文學ノ講義ハ學生ノ隨喜渴仰スル所ニシテ君ガ學術雜誌上ニ公ニスル所ノ論文評論ハ誌上ノ彩華タルナリ而シテ君ノ得意トスル研究範圍タル佛蘭西文學史ニ於ケル君ノ興味ノ中心ハ佛蘭西浪曼派ノ文學ニ在リタルモノノ如ク而シテ豫テ君ハバイロン並ニ其ノ佛蘭西文學史的研究ヲ計劃シ居タルコトヲ仄聞シタリ君ノ此ノ研究ノ完成ハ必ズヤ學界ノ耳目ヲ驚動セシムベキモノナルニ期待終ニ空シク中途ニシテ而シテ殪ル痛惜何ゾ堪ヘン學界ノ一大恨事タリ而シテ君ハ行純ニシテ德高ク實ニ同僚ノ師表タリ資性高潔恬淡、意氣颯爽快活、邊幅ヲ修飾セズ人ニ接スルヤ豁然胸襟ヲ開キ脫然儀容ヲ去リ快談湧クガ如ク熱論燃ユルガ如シ而シテ純情溫厚ニシテ情誼ニ厚ク實ニ紳士ノ典型タリ

嗚呼君擧世ノ輿望ヲ荷ヒテ翩然トシテ窈冥ノ際ニ隱レ稀代ノ高材ヲ抱イテ忽焉トシテ黃泉ノ下ニ入ル年ヲ享クルコト四十有五嗚呼哀哉君一男二女アリ嫡不二雄君齡漸ク六歲先考ノ柩ヲ護リテ嬉戲ス悲酸何ゾ堪ヘンヤ嗚呼成瀨教授逝ケリ碩學亡ビ高士仆レ或ハ師ト別レ或ハ友ヲ喪フ本學部擧ゲテ君ガ遠ク埃壒ノ外ニ去リ高風逸韻復タ仰グナキヲ哭ス而シテ我ガ法文學部ハ此ノ偉大ナル文學者名教授ヲ失ヒタルナリ我ガ若キ法文學部ハ教官全員ノ不斷ノ努力ニ依リテ其ノ實質的向上發展ヲ計リ漸ク今日ニ至リタル所ナリ然ルニ是ノ時ニ方リ天道何ゾ斯クノ如ク夫レ無情ナル何ゾ偉才ニ祚ヒセズ我ガ學部ニ禍スルノ此ノ如ク夫レ酷ナルヤ浩嘆咨咨トシテ慰ムルニ由ナク長恨綿綿トシテ盡クルノ期ナシ嗚呼曩日ノ晤語猶耳ニ盈チ而モ溫容再ビ接スルノ時ナク卓說新ニ求ムルニ由ナシ豈痛恨ニ堪ヘンヤ

君　君ノ愛スル本學部ヲ棄テ去リ悠悠トシテ獨リ今那レノ邊ニカ遊ブ嗚呼哀哉

然レドモ成瀨教授君冀クハ自ラ慰ムル所アレ君ノ功德ノ我學界ト本學部トニ寄與スルモノ永ヘニ滅セズ君ノ志業ヲ繼述スルモノ世間或ハ其ノ人アラン君以テ瞑スベシ

嗚呼哀哉尙クハ饗ケヨ

昭和十一年四月十六日

九州帝國大學法文學部長　正五位勳四等　阿　武　京　二　郎

弔辭

成瀨君、日頃恰も健康そのものゝ如くであつた君が四十五歳を一期として永く此の世を去らうとは吾々の豫想し得ない所であつた。大學時代に君と相識り卒業後フランスで再會し、其の後十年以上九州帝大の同じ學部に職を奉ずるに至つた淺からぬ關係から、僕は君の一個の友人として當地に於ける君の朋輩を代表し、玆に君の永遠の門出に際して送別の辭を呈したいと思ふ。

東京帝大英文科に於ける君の卒業論文は批評文學に關するものであつた。批評文學は卽ち人生の批判であり、學徒としての君の一貫した態度は旣に此の時に出來てゐたのであつた。さうして、君のこの論文が極めて優秀なものであつた事を僕はその審査員の一人であつたブレイフェア講師から聞き知つて君に對する敬意を一層深くしたのであつた。君は又學生時代から英語の外に獨佛語に長じ、ロマン・ローランの「トルストイ」を譯して出版したのは卒業以前であり、卒業後米國を經て渡歐するに及んでは親しくロマン・ローランに就いて敎を受けたこともあつた。君が愈々九大に赴任して以來主力を注いだ講義はフランス浪漫派の研究であつたが、それも文學を人生の批判として觀る君の持論の然らしむる所であつたと思

ふ。東京帝大で英文學を修め其の後佛文學の特に浪漫派に興味を感じた君の心がバイロンに向いたのは寧ろ當然であり、君はフランス文學に對するバイロンの影響を研究せんことを豫て僕に語つたのであつた。さうして昨年の洋行中にその材料も恐らく調査蒐集されたことゝ思ふのであるが、この研究の發表を見ずして君が長逝したのは學界のためにも惜みても餘ある次第である。

君の今度の歸朝後は日なほ淺く、度々會つて話す機會もなかつたが、一夕少數の同僚が集つた席上で、君は近世の獨逸哲學がフランスの文人の思想に負ふ所極めて多きを指摘したのであつた。是が吾々の君の氣焰の聞き收めであつたが、是は君のバイロンに對する興味と共に、君の學が英獨佛に亘つてゐたことを偶々證するものである。尙君の絕筆としては今月十三日發行の九州帝國大學新聞紙上に揭載された「基礎學の必要と大學」なる一文があるが、僕は日本では未發表の君の講演、君が最近の洋行中昨年巴里の大學においてなした「モンテーニュと東洋の悟道」と題せられたものに就いて今暫く君と語らうと思ふ。この中には君の人生觀と共に人となりが躍如としてゐる。君は敎養あるフランスの紳士淑女に向つてこの講演をなすに當つて、先づ釋迦に說法なる言葉を用ゐて謙遜の意を表し、本論の冒頭においては、モンテーニュの隨想錄をわが徒然草に比して人生に對する謙虛なる兩者共通の態度

を指摘し、同じフランスの文人でも、ラ・ロシュフコーやルソーなどは所詮自己主義者であり、その書く所は自己辯護であつたのに對し、何の飾氣もない平素の自己を寫し出したモンテーニュが如何に眞摯であり明朗であつたかを君は述べてゐる。さうして君はかう言つてゐる。モンテーニュは謙讓にして言はざるが故に吾々を引きつけ、ルソーは口に兄弟愛を叫ぶが實は同胞の愛を欠いでゐる。隨想錄の著者モンテーニュのもつこの謙讓、この正廉、この爛熳、この自我沒却こそは吾が東洋の傳統的悟道と符合するものである。君はなほ語を續けてかう言つてゐる。東洋の悟は要するに物の道理を辨へた眞如の心境に達して、吾々の存在を攪亂する凡ての人爲的な物慾から解脫した心境を指すのである、人生の苦はその人間的慾情の爲であるとするのである。故に最高の心域に入るのは心中の鬼畜を滅するにある。是は容易なことではないが是に打勝たねば崇高な域には入り得ない。この悟に對する最大の敵は死を盲目的に恐れることであり、是に打ち勝つて初めて悟の道に入り得るものであると思ふ。かう言つて君は是と同趣旨のモンテーニュの句「死を悟つたものは自由を悟つたのである、死の何物かを知り得たものは奴隸的屈從の苦を忘れ得る」といふ言葉を引用してゐる。

君はこの講演をした時自らの死の近きにあることを恐らく自覺してはゐなかつたであらう。然し文學を通じて人生批判の堂奥に分け入つた君はこの時既に何時死しても死にされる、

否生死を超越した明朗の心域に恐らく到達してゐたのであろう。

成瀬君、學者としての君は實に愼重であり、謙遜であり、決して功を急ぎ名を求むるが如きことはなかつた。この眞摯な態度が天眞爛熳な君の天性と結合して深い悟道に入らしめたのであらう。

君の講演は今まで述べたゞけではなほその梗概さへ終つてゐないのであるが、是以上は割愛することにしよう。君は生前僕の願を容れて此の講演を近く發行の豫定である我が法文學部十周年記念論文集の中に入れることを承諾してくれた。それでこの高遠な思想、君の文學研究卽ち人生研究の結論を抱擁するこの不朽の文字は我が論文集の誇として永く傳はるであらう。

成瀬君、四十五歳の一生は普通の意味では長いとは言へぬ。然し君の惠まれた境遇、君の態度で過されたこの歳月は決して短かいとは言へない。君は充實した生活をして來たのであつた。少なくともこの點において君は滿足であつたらう。

成瀬君、それでは左樣なら。然し永遠の國ではお母樣や御舍弟の靈が君を待つてゐる。さうして一旦その國で相會へば悲しい訣別の言葉はも早繰り返されないであらう。

昭和十一年四月十六日　　友人總代　豐田實

弔辭

成瀨君よ、君と僕達とは二十五年以上の友人だ。殊に僕は學生時代に隨分君の世話になつた。僕が大學を出ることが出來たのは全く君のお蔭だ。

芥川・久米・松岡それに君と僕とで、新思潮を出した時、君は十五圓出し僕達は、參圓宛出す筈だつたが、僕は金がないので、その參圓も出さなかつた。新思潮に依つて世の中に出た僕達の存在に、何等か價値があるとしたならば、君の功績も長く記憶されるだらう。

君は學校を出ると、直ぐフランスへ行つた。そして巴里が好きになつたと見え、隨分長く居た。君は凝り性だ。フランスに凝つたのだ。フランスの文化に、文學に、生活に凝つたのだ。

君は、歸ると大學の先生になつた。僕達が書け〳〵と云つて勸めたが、君は何にも書かなかつた。そして、風光明媚な福岡の地に悠々自適の生活を送つてゐた。君はフランス文化の精神、フランス文學の眞髓を體得してゐた丈に、君の佛文學に於ける位置は、獨特のものであつただらうと僕は信じてゐる。慾には、何か著書でも殘して置いて貰ひたかつた。

君は全く人生を愛し、文學を愛した、そして生活を樂しんだ。だから君自身としては何等

殘念なことはあるまい。が僕等としては、もう十年生きて貰ひたかつた。殊に、君のお父さんは、數年前君の弟俊介君を亡くした。俊介君もいゝ息子だつた。お父さんは、あきらめかねたと見え、せめて俊介君臨終の地たるテヘランを見ようとして、日本人のあまり行かない波斯入國を企てられたのはつい昨年の事だ。さうした慈父の胸に、君の急激な死が、どう堪へるかを考へると僕は暗澹とするのだ。

その上君の遺兒達もまだ幼い。福子夫人は賢明で、長女光子さんは、秀才の譽れ高く、何も心配な事はないだらうが、せめて長男の不二雄君が廿になる迄は、君は生きてゐるべきだつた。が、しかし仕方がない。君の境遇や君の性格や、君の運命が君の死を決したのだ。

君も平生の人生修業に依り、その高い文學的修養に依り、死については相當の覺悟はしてゐただらう。どうか安らかに、君の家の御宗旨に依り、西方淨土に往生してくれ給へ。先きに芥川君を失ひ、今また僕よりも、ずつと年の若い、君と別れる。何年會はなくても、九州にでも、巴里にでも君がゐてくれることは、賴もしかつた。

が、今はもうこの世の中には、何處にもゐない。せめて、君の遺稿でも出版して君を偲ぶよすがにする外はなくなつた。

昭和十一年四月　　菊池寛

故成瀨正一教授年譜

略歷

明治二十五年四月二十六日　横濱市東神奈川に生る（本籍　香川縣木田郡井戸村四一一四番戸）
大正五年七月　東京帝國大學文科大學文學科卒業
同　八月　研學の爲歐米に留學
同　八年二月　歸朝
同　十年二月　佛蘭西文學研究の爲渡佛
同十四年二月　歸朝
同　十月　九州帝國大學講師就任
同十五年五月　九州帝國大學教授就任　法文學部佛文學講座擔任　講師囑託解任
昭和十年一月　歐洲各國へ出張を命ぜられ一月二十六日門司港解纜渡佛
同　十一月　歸朝
同十一年四月十三日　福岡市地行西町の自邸にて逝去

作品と論文

骨晒し	（小説）	新思潮	大正五年二月
ロマン・ロオラン著 トルストイ（翻譯）		新潮社	同 三月
最初の石	（小説）	新思潮	同 四月
罪	（小説）	同	同 五月
ロマン・ロオランの手紙		同	同 六月
航海	（小説）	同	同 十一月
紐育より（北米通信）		同	同
囚人と小さき花	（戯曲）	同	同 六年一月
一人と獨り	（小説）	同	同
紐育近信		同	同
紐育より（二）		同	同
創作に於ける個人性と文藝批評	（論文）	同	同 三月
紐育より（第三信）		同	同
米國の社會と藝術（ボストンよりの通信）		時事新報	同 十二月

フロリダ行き（亞米利加通信の一）	帝國文學	大正六年十二月
カナダの旅行（亞米利加通信の二）	同	同　七年二月
瑞西の旅（紀行）	中央公論	同　八年四月
旅日記二三	讀賣新聞	同
或夏の午後（ロオランとの一日）	新潮	同　五月
象牙島田（創作）	雄辯	同　同
瑞西日記（上・下）	時事新報	同　夏
瑞西の旅（紀行）	人間	同　九年二月
ヂュ・ベレエの佛語擁護論	佛蘭西文學研究（第三輯）	昭和二年十一月
釣魚漫談（一・二・三）	福岡日日新聞	同　三年六月
「新フランス文學」（新刊紹介）	東京朝日新聞	同　五年十二月
旅の隨筆	九大文化	同　七年三月
十八世紀に於ける文藝サロン	文學研究（第二輯）	同　十月
同	同（第三輯）	同　八年二月
新舊兩派の文藝論爭	同（第七輯）	同　九年一月
Montaigne et la Sagesse d'Extrême-Orient	Université de Paris, Institut d'Etudes japonaises, Travaux et Conférences, Fascicule II, 1935.	

基礎學の必要と大學　九州帝國大學新聞　同　十一年四月

旅行報告書　同　同

同　上（再錄）　文學研究（第十六輯）　同　七月

モンテーニュと東洋の悟道　同　同

講義

大正十四年　第二學期　講義　古典派文學

大正十五年　第一學期　講義　古典派文學

演習

同　第二學期　講義　浪曼思想先驅者としてのジヤン・ジヤツク・ルソー

昭和　二年　第二學期　演習　浪曼派文學研究（小說講讀）"Adolphe" de Benjamin Constant.

同　浪曼派文學研究（戲曲講讀）"Hernani" de Victor Hugo.

昭和　三年　第一學期　講義　十九世紀前半に於ける浪曼思想

演習　（古典戲曲）"Le Misanthrope" de Molière.

同　第二學期　講義　十九世紀前半に於ける浪曼思想

演習　王朝時代に於ける女流文學者研究 Madame de La Fayette :"Princesse de Clèves".

昭和四年　第一學期　演習　古典派文藝思想研究
同　第二學期　講義　佛蘭西文學史（中世紀）
昭和五年　第一學期　講義　佛蘭西文學史（中世紀後半より）
演習　小說家としての Voltaire.
同　第二學期　講義　佛蘭西文學史（文藝復興期）
昭和六年　第二學期　講義　十八世紀佛文學史
昭和七年　第一學期　講義　佛文學史概說（十八世紀）
同　第二學期　講義　十八世紀佛文學史
演習　ヴォルテールの悲劇　Voltaire: Théâtre. 2 Vols.
昭和八年　第一學期　講義　王朝末期に於ける文藝思潮
演習　クレビョンの悲劇　J. de Crébillon: Théâtre complet.
同　第二學期　講義　王朝末期に於ける文藝思潮
演習　浪曼派の文藝とその實際　V. Hugo: Préface de "Cromwell"; "Hernani."
昭和九年　第一學期　講義　初期浪曼派文學
演習　十八世紀に於ける風俗喜劇